

オランダ語の歴史



河島敬子

「そろそろ来年あたり、延長は無理かもしれないなあ」

西向きの二LDKのマンションはいくら冷房を強くしても磨りガラスを通る夏の強い陽ざしは容赦なく部屋の奥まで注ぐ。雅之はカーテンを引いた。暑さに加えて部屋の中には重苦しい空気がよどむ。

「年齢的にも単身赴任は健康上良くないし、もう充分働いてくださったし……」

雅之のワイシャツを畳みながら珠絵は東京と大阪を行き来する二重生活が十二年に及ぶことに思いをはせていた。

「今まで大学のために産業界と連携して開発してきた大型プロジェクトが一段落したのだからあなたの貢献は大きいんじゃないの？」

「だがなあ、レーザー照射による癌のピンポイント治療は動物実験を経てこれからが本格的正念場にはいるんだよ」

「医学部からのバックアップはないの？」

「難しいなあ、俺の年齢もあるんだろう」

「最高齢の教授は何歳？」

「理事は別として七十四歳になるだろうな」

「それじゃあ、もうそろそろお引き取り願って、っていうこと？」

「まあな、俺より年長の人はいないからなあ」

雅之にはこの東大阪のモノづくりの中小企業が集積するメッカで共同開発した試作品をどうしても実用化させたい商品がいくつかあった。

「その他に腰痛緩和のベッド。眠っている間にコンピューター管理でベッドがゆっくり波状振動して腰の圧迫を防ぐ仕掛けになっている。試作品には百万かかっているんだ」

「本当に効果があるの？」

「俺の狭窄症の腰痛が嘘みたいに治ったことが実証だよ。ベッドの腰の部分にあたりるところが平らにならないように工夫をしてある。商品化には一千万円は必要だろう」

国の研究施設を六十三歳で定年退職した後、人生の第二ステージをこの大学に職を得て十二年が経つ。十一月に一年更新がなされるかどうかが決まることになっている。あと一年、一年だけでよいから延長して欲しいと雅之は心底思っているようだ。せっかく立ち上げたプロジェクトを仕事なかばで放り出すのは悔しく残念という気持ちは珠絵にもよくわかる。産学連携という大学と企業との協働事業を立ち上げ、研究補助金の申請によって文部科学省から一年で十二億円の金を大学に調達してきた。しかし、去年は大阪府から下りた二千万円だけだ。文部科学省に十億円の補助金を申請していたが、この大型助成金は通らなかった。このことも一因で大学は雅之にポストを割り当てなかったようである。二月の誕生日を迎え、後期高齢者の仲間入りをして半年が経っている雅之にとって一年更新の可能性はほとんど不可能に近いのは雅之自身が一番良く知っているはずだ。

「大学で公的補助金が得られない以上、私達の老後を考えるとそんなお金どこから出すの。そんな余裕はないじゃない」

「うーん」

「だれか出資してくれる人はいないの」

「この不景気ではなかなかベンチャー企業に出資してくれる人は少ないからなあ」

厳しかった残暑も彼岸を過ぎる頃にはすっかり秋の空気と入れ替わった。珠絵は週末に雅之のマンションを一ヶ月ぶりに訪れた。十月は雅之が東京に出てくることが多かったため京都、東福寺の紅葉狩りを二人で楽しむ予定だった。マンションに着くなりさっそく掃除、洗濯にとりかかった。掃除機をかけながら押入を開けると敷居と布団の間に最近はいいぞ見かけることも少なくなった三センチ大の綿埃がふわふわと光りの中で舞い上がった。コンピューター仕掛けのベッドの下には何処からどう繋がっているのかコードの先を辿っていかなければわからない四本の太さも色も違うコードが蛇のようになっている。

どのコードを抜いたらどの機械が止まってしまうのか一本づつ辿って確かめて抜けるものは抜いてすっきりさせる。

「あくめんどくさいなあ、どうして私がこんなことまでしなくちゃならないの」

珠江は雅之が日頃、家の中の掃除どころか整理整頓さえも全くしていないことに

腹がたつてきた。しかし、掃除をしておかないとまた、次ぎに来るときはもっと掃除がやりにくくなることは目にみえている。珠江はコードを束ねるとクリップで短く束ねた。少しは整頓できて掃除をする気分になってきた。束ねたコードを避けながら手で押さえて綿埃を吸い取る。二十分も四つんばいになっていると腰が痛い。「なんでこんなに埃が舞い上がるまで溜め込むのかしら。少しは掃除をしたらいいのに」

痛い腰をやっと伸ばして立ち上がった高さの障子の棧がうつすらと白くみえる。掃除機の棒の先で吸いとりとうとして障子が吸い付き

「あつ、やっちゃった」

障子を突き破って穴を開けてしまった。

「仕方ない、彼には内緒にしておこーっと」

次ぎは風呂場とトイレだ。マンションは換気扇がよく働くのでカビはそれ程生えてはいないようだ。しかし、東北大震災の校訓から雅之はバスタブに緊急用の水を貯めるようになってかれこれ一ヶ月も貯めっ放しなのである。蓋を開けると表面に澱が湧いた水がタプタプと溢れ出てきた。

「こんな水、飲料水にはできないのに。トイレに使う積もりなのかしら」

雅之は結婚当初からシャワー党でバスタブを使うことはない。もったいないと思いつつも掃除に使えばいいのでタイルの目地から下水孔までクレンザーをつけてタプタプでござとこすった。黄ばんだ水垢がついていたバスタブも、くすんでいたタイルの壁も見違えるようにぴかぴかになった。

トイレはクリーナーをスプレーしておかないとすぐには掃除ができない。黄土色にこびりついた汚れは買い物から帰ってからとればいい。気を取り直して珠江は近所のスーパーへ買い物に出掛けることにした。

雅之が家事を全くやらないのは今に始まったことではない。子供達が保育園児の頃は夕食時に帰宅して一緒に食卓を囲んでも子供達が寝てしまおうと車で十五分の職場に戻ってひと仕事をする生活パターンを繰り返していた。そんな夫に珠絵は三人の子育てに追われていてもあえて家事を頼むことはしなかった。珠江の遠慮が家事に無関心な夫を作り上げてしまったのかもしれない。その代わり、子供の相手では保育園の保父さん顔負けの遊び上手だった。部屋中にダンボールでジオラマを

作って電車ごっこをしたり、外でのキャッチボールやサッカーゲームは汗と埃で真っ黒になって童心に戻る。珠絵が買い物から戻ると部屋中に散乱した夢の島の陣地の中で遊び疲れた子供達と昼寝をしていたこともあった。しかし炊事、掃除となると一切、無関心で「掃除などしなくても人間、死にはしない」が口癖で「誇り」ならぬ「埃」高き男だった。

冷蔵庫を開けると干からびた梅干しがカラシコロシと転がり出てきた。芽の出た皺くちななジャガイモは四週間前に珠絵が料理に残したものがある。残っていた。食材となるものは何一つない。食事に関してはコンビニの大のお得意さんである。独り暮らし用のミニパックの総菜が充実しているらしい。鯖のみそ煮、ポテトサラダ、それにけんちん汁を付けて立派な夕食となる。そして儉約した時間は取り憑かれたように寝ても覚めても新しい事業を立ち上げることに奔走していた。

大学キャンパスのイチヨウ並木も黄金色に染まった十一月の始め、雇用更新の通知は雅之に届かなかった。このまま大阪に居座っていても仕方がない。そろそろ決心のしどころか。

年が明けていよいよ退職することが本決まりになった。十二年間とはいえ人生の第二ステージを全力で疾走した数々のイベントが脳裏に浮かんでいるのだろうが珠絵に語ることはなかった。東大阪市の町工場は高い技術力を持つ職人達のメッカといわれる。歯ブラシからロケットまで精密機器を長年の勘と手作業で生産し続けて今日の日本経済の一翼を担ってきた。油の臭いや埃にさえ郷愁を覚える、という雅之の言葉に珠絵はうなずいた。マンションから荷物が出払って部屋の中が閑散としたのを見て雅之は改めて

「ああ、これで大阪に居場所はない」

感傷よりすぐ気持ちを切り替えようという決意が感じられた。

四トン積みのトラックが東京の自宅に着いた時、珠絵は丁度、仕事で留守だった。雅之の携帯電話は台所のテーブルの上におかれたままで、その日の大騒動の一部始終を珠絵が雅之から聞いたのは帰宅してからであった。

一番広い八畳間にダンボール箱が次ぎつぎと運び込まれ天井まで積み上げられた

中で雅之は書籍の仕分けをしていた。一番上の箱を取ろうとして持ち上げた途端、腰に「ん？」と不快な鈍痛を感じた。抱えたダンボール箱を放り出してしばらくじつと立っていると次第に痛みが酷くなってくるのがわかる。向きを変えすることもかむこともできない。珠絵を呼ぼうにもあまりの痛さに脂汗が額から吹き出し、脇の下がじつとりとしてくる。

「珠絵！ 珠絵！」

雅之はありったけの声を振り絞って妻に助けを求めたが返事はなかった。そうだが、今日は朝から仕事で留守だ。「どうしたものか」少しでも体を動かすと腰に激痛が走る。このままじつと立って様子を見る以外にないか。棒立ちのまま時の経つのがこれほど長く感じられたことはなかった。体は動かなくても思考だけは交錯する。冷やした方がいいだろう。でも台所までのほんの数歩が百メートルにも感じられた。仕方がない。少しずつ右に移動しながらベッドの端まできた。そこで運良く積み重ねられた寝具に寄りかかってずるずるとベッドへ倒れ込んだ。

突然やってきたうしろから腰を強打されたような痛みで雅之は結局、二日間は寝返りを打つことも上半身を起こすこともできなかった。腰から下が「ストーン」と抜け落ちたような感覚もある。四日目ごろから少しづつ楽になり、歩くこともできるようになったので整形外科を受診すると

「椎間関節性腰痛症ですね」

と診断され椎間関節部に鍼をピンポイントで打ってくれた。椎間関節の消炎と鎮痛のお陰で血行も改善され、一週間もするとほとんど痛みは消えていた。「魔女の一撃」のとんだハプニングは雅之に久しぶりの休息の時間を与え、東京での生活スタイルを考えるよい機会となったようだ。

四十四年間の結婚生活の間に三人の息子達はそれぞれの家庭を持ち、再び夫婦二人だけの生活に戻った今、二十四時間、同じ屋根の下で暮らして日常の細々したことまで歩調を合わせていかなければならない。この十二年間は東京と大阪を互に行き来して「お客さんごっこ」の良いところ取りの生活をしていたに過ぎない。雅之はこれまで保たれてきた夫婦の暗黙の均衡が、地響きをたてて崩れ去るのを感じたに違いない。三度の食事すべてを珠絵に頼って、飼いネコのように大人しくしていくのか、とも。いや、「食」の自立が本当の意味の自立であるならば、まず自分の

食事は自分で支度することだと考えるに至った。

「新生雅之」の誕生である。朝食にはスペシャルドリンク。冷凍ブルーベリー五十グラム、生姜一片、黒酢二十cc、自家製ヨーグルト五十cc、大麦葉緑素の粉末六グラム、バージンオリブオイル十cc、蜂蜜適宜をジューサーにかけて出来上がりにしてある。昼食には餅、納豆、豆腐、もずく、バナナそして子供のように楽しみにしているのがデザートに毎回異なるプリンを食べること。八十八円のシンプルプリンからチーズケーキプリン、抹茶プリン、紅茶プリンなど一個五百円もする高級品は自分への褒美とした。

珠絵は毎日、同じメニューでも飽きずに続けられる信念の堅さになかば呆れてみていたが敢えて買い物も含めて手伝おうとはしなかった。仕事を持つ身にしてみれば安心して家を留守にできるし、夕食以外は支度をしなくて済むからである。しかし、困ったことに台所は一つ、冷蔵庫も一台しかない。どう二人で使い分けるか。いつも四百リットル入りの冷蔵庫は満杯状態である。

夕方、遅くに帰宅した珠絵は夕食に手早くブタ肉のみそ漬けを焼くともう一品と、野菜の煮物を冷蔵庫内で探した。確か昨日、沢山作り置きしてどんぶりに入れて三段目に置いたはずなのに消えている。

「ねえ、あなた知らない？」

雅之に尋ねてみる。

「ああつ、それ、タッパーに入れ替えて三段目にあるはずだよ」

そう言われて新品の大きめのタッパーを取りだしてみるとちゃんと中に収まっていた。

珠絵は食べ残しはどんぶり容器に入れたままラップをして冷蔵庫へ放り込むのを常としている。電子レンジで温めるときにそのまま使えて便利だからである。一方、雅之は狭い冷蔵庫を効率よく使うために食べ残しが減る度にプラスチック容器を二回でも三回でも小さい容器に変えて積み上げていけば場所をとらずにすむからやり方を変えようと言い出した。しかし、そんなことをしたら三センチほどの小さい容器は隅っこへ隠れていつの間にか忘れ去られてしまうだろう。容器で中身を記憶し

ている珠絵は同じようなケースが並んでいると蓋を開けて見ない限りわからないのだ。

「そんな時にはね、容器の手前の見えるところに日付とメモを貼っておけばいいよ」

「小さい容器はまとめて置き場所を決めておけば忘れることはない」

なるほど、言い出したら後へは引かない雅之である。

「あなた何年主婦やっていたの。私より家事能力がありそうね」

「ちよつと工夫すれば快適ライフになるということさ」

好きなようにさせることにした。

提案をした雅之はフットワークの良さもあいまって珠絵の留守の間に近所の百円ショップで大きささまざまなプラスチック容器を二十個近くも買い込んできた。それらを流し台の脇に新たに作った専用ラックに並べて自分のスペシャルドリンクの残り物だけでなく、総菜の残りものも中身を一つ、一つ点検した雅之はきちんと小ささまざまな新しいプラスチック容器に移し替えて日付と中身を表示するテープを貼った。冷蔵庫の中はすっきりしただけでなく一目瞭然となったのである。こうして雅之は主婦ならぬ主夫の指導力を発揮し始めた。

「ほうら、冷蔵庫の中が広くなっただろう。こんなにスペースができた」

珠絵は雅之の背中越しにそっと覗いてみる。なるほどいままで満員電車並だった庫内がうって変わって片付き、ラベルを貼った大きささまざまの容器が整然とこちらを向いて鎮座している。ゆとりのスペースさえできているではないか。

しかし、面白くない。台所はこれまで珠絵の城ともいうべき不可侵の領域だったはずだ。そこへ雅之流で采配を振るわれたのでは城を乗っ取られた気分である。もともと、視点を変えて考えてみると、夫が自立して手が掛からなくなったということは、妻には自由になる時間が増えたことではないか。冷蔵庫が広く使えるようになったのは雅之の貢献が大ではある。「今日のところは名を捨てて実を取るということにしておこう」珠絵はにっこりと微笑を返した。

雅之が台所を使うようになってシンク内に置かれた生ゴミの量は増える。食事の

支度をする度に屑入れに使っているスーパーのビニール袋から生ゴミが溢れ出した。一杯になる度に外のゴミ箱へ持っていく珠絵のやり方に雅之はまたもや抵抗する。「シンクの脇にすぐ処分できる七十リットル入りのビニール袋を作りつけたからこれが一杯になる三日ごとの回収日に外へ出す」

と宣言した。日曜大工店に日参して一ヶ月後にはシンク脇にゴミ投函器を四機備え付け、生ゴミ、プラスチック、缶、ビン毎に区分けするようにした。行政は分別ゴミ収集を有料で行っている。可燃物と不燃物のゴミは指定の有料ゴミ袋に入れて門の前に出しておけば回収される。その他のペットボトル、プラスチック、ビン、缶、新聞紙、牛乳パック、雑紙類はリサイクルするため週単位に決められた曜日にすべて無料で回収される。

たかがゴミ、されどゴミである。生活をする以上は必ず発生する毎日のゴミ処理問題。生ゴミをシンク内に放置せず、すぐに外のゴミ箱に捨てたい珠絵と小袋に密閉して七十リットルのゴミ投函器に貯めてからゴミ収集日に出したい雅之。不要品に対する処理方法で正面から激しく角突き合わせるようになった。

「台所は私のテリトリーよ。私がやり易い方法でやるのにいちいち文句をいわないで」

珠江は雅之の指図は受け取らなかつた。

「俺だって毎日、使うんだ。少しでも使いやすいように提案してるんじゃないか」
気色ばんで雅之も負けてはいない。

「試しにしばらくやってみてそれから反対するならすばいい」

珠江は雅之の強引さに

「じゃあ、やってみれば」

といてその場はあっさり引き上げた。シンク内の水切り籠は大きい方が使いやすいのには雅之は拳大の小さな袋を買ってくるので頻繁に廃棄しなければならぬ。その上、生ゴミのためにわざわざ袋まで買ってくる神経が珠絵には全く理解できないのである。

「いいじゃあないか。気持ちよく生活するためなんだから」

珠絵は有料ゴミ袋だつて一番小さい十八リットルサイズの安いものしか使わない。それなのに雅之は四十リットル用のたっぷりサイズを買ってきて惜しげもなく使

う。男と女、こうも金銭感覚が違うのか。

「生ゴミも臭わずに簡便に家の中で処理できる」と自画自賛する雅之であった。

ある日、

「納豆のパックはプラスチックゴミでいいの？それとも生ゴミなの？」

と聞かれた珠絵は一瞬、言葉に詰まった。今までおおざっぱに気分任せで分別していたからである。納豆のように洗っても落ちにくいものはプラスチックでも可燃ゴミとして廃棄するよう行政では指導している。主体的住人を自認する雅之はプラスチックゴミ、可燃ゴミを分別するところから学習を始めたが、広報誌のガイドブックに首っ引きで一ヶ月もすると可燃物かりサイクル可能なプラスチックゴミか、はたまた応用も効くようになり律儀に分類しているうちにゴミについては何でもござれのゴミ博士になってしまった。それにプラスチックトレーや納豆の容器を熱湯できれいに汚れを洗い落としている。そこまで徹底してリサイクルに出すなんて。リサイクル品は無料で回収される。無料で捨てるものにお金をかける人って見たことない。雅之のとことん極めて「私、食べる人、君、ゴミを出す人」のように他人事ではいられなくなった新生活のスタートだった。

そして収集日には、ゴミカレンダーを確認するとさっさと生ゴミ投函器に入っている七十リットル入りの重たくなったビニール袋を束ね、回収用有料ゴミ袋に入れて門前に出しに行く。これは親切というより珠絵がゴミ袋をケチって頻繁に出さなくなったため自ら行動するようになったのである。

さて、ゴミ問題は珠絵が一步譲って雅之流に従ったので生活もスムーズに運ぶようになって三ヶ月が過ぎた。高齢者にとっては規則正しい運動が筋力の衰えを防ぐ上で有効であるとの情報を仕入れてきた雅之は最寄りのフィットネスクラブに通うと言い出した。もともと職場のサークル活動ではテニスが続けてはいたがこの半年間、運動らしい運動をしていないため体重が増えてきたのも決断を後押しした。週に三回はマシーントレーニングと水泳で汗を流してくる。その度にウエットスーツや着替えも自分で洗濯機を回して物干し竿に干している。しかし、これは始めから

自分で率先してやっていたわけではない。洗濯は週に二回、まとめてする珠絵の洗濯日に合わないために自ら洗濯して干すようになっただけである。その洗濯機に洗剤をボトルからジャボジャボと注ぎ込んでいるのを通りがかりに見つけた珠江は目が点になってしまった。

「そんなに洗剤入れても洗浄力には変わりないから計量でしっかり計って無駄使いたくないですよ」

「君の洗った洗濯物は白い物がだんだん黒ずんでくるのは洗剤が足りないからなんだ。

ほら見てみる。こんなに白いんだから」

自分の下着を見せる。

「色ものと白いものは別べつに洗わないとね」

だから雅之が洗ったものは洗剤の芳香が漂う。これって洗剤がよく落ちてない証拠じゃないの。

「お宅の御主人、マメねえ」

回覧板を届けにきた隣りの奥さんは丁度、二階のベランダで洗濯物を干す雅之に目が留まった。珠絵は振り返って二階を見上げて

「えっ、ええまあ、おほほほ……」

夫を尻に敷いているなどとは思われない。その雅之の物干しの仕方は自分の専用タオルを竿に二つ折りにして重りをつけて干すのである。乾いたときにはアイロンでプレスしたようにピンと張っている。

「気持ちがいいじゃないか。俺のタオルはこういうやり方で干してくれ」

と注文が出された。寝具のシーツもこの方法で干すとホテルのシーツのようにアイロンをかけたようにピンピンになる。珠絵は母親にも教わらなかったクリーニング屋仕様を夫である雅之に指南されたのである。

主婦業に進出してきた雅之であるが掃除と夕食作りには全く干渉してこない。夫が掃除機をかけたことは一度も見なかったことはないし、朝昼は自ら用意するのに夕食は珠絵が仕事で遅くなり予定の時間を一時間以上過ぎても出来上がって、呼ばれるまでひたすら待っている。

「早くしてくれ」

とも

「手伝おうか」

とも言わないで自室でパソコン相手に趣味の碁をさしている。

いつしか街路樹の銀杏が落ちてあちらこちらで独特の臭いを放っていたが、そろそろ朝晩は暖房が恋しい季節がめぐってきた。北向きの台所のフローリング仕様は特にテーブルの下が冷える。台所を出たり入ったりしてこまめに動き回る珠絵は寒さ対策にフリースを着込んだ上、靴下は二枚重ねて防寒に余念がない。

それに対してテーブルに向かってじつくと座っていることが多い雅之は

「脚が寒い」

「厚手の長い靴下を履いたら……」

珠絵の提案には上の空で雅之は全く別のことを考えていた。

「テーブルの下の四方をこたつ式にドレープで覆えば暖かくなるかも知れない」

床にはホットカーペットが敷いてあるのでその熱を逃がさないように布を垂らせば保温できるという発想である。またしても雅之の出番となった。

百円ショップで九十センチ幅のフェルト地を沢山買い込んできてテーブルの周囲に暖簾のように床までたらしした。食事の時にはその暖簾の間にこたつのように脚を入れて「温かい」と相好を崩している雅之を見て、はたまた次は何を発明してくれるのかと秘かな期待を寄せるようになっていた。

「来年の正月には翔太一家が泊まりに来るそうよ」

「そうすると部屋が足りなくなるか」

「悠二の部屋があるじゃない」

「でも、二十年間の汚れが目立つなあ。模様替えをするか」

早速、近所の工務店二軒に見積もりを頼んだところ九十五万、安くても八十万かかるという。

「いっそ、俺がやるか」

「ええっ、私の手はあてにしないでね」

「大丈夫だ。少しずつ出来るところから始めていくから」

「天井はどうするの」

「天井の張替えは難しいからペンキを塗るんだな」

「壁紙と絨毯は」

「壁紙は前に一度張り替えただろう、子供部屋を」

「そう、あの時は悠二が手伝った」

「最近は何がついた簡単に貼れるものが出ているから」

「そういわれてもまた」

「ちよつとここ持ってきてくれ」

などと呼ばれるのは目にみえている。

師走の半ばに入ってリフォームは仕上がった。カーテンや絨毯を新調して天井のしつこくにペンキを塗ると部屋は見違えるように明るく住み心地良さそうだ。翔太一家を受け入れる準備は整った。

人間はその置かれた環境を最大限にプラスに変化できる能力、幸運を発見できる力を備えているともいわれている。幸運を呼び寄せる能力、セレンデイピテイを雅之は自ら引き寄せたのではないだろうか。

仕事がある日の珠絵は朝が早い。食後のシンクに溜まった洗い物を横目で見ながら

「悪いけど洗っておいてくださる?」

との問いに二つ返事で

「ああ、いいよ」

と雅之。

「今夜、会合があるから夕食は外で済ませてくるけど あなたはどうする?」

「心配するな、適当にやるから……」

珠絵は内心、「しめた!」という勝ち組の気分だった。夕食を自分で作らせるチャンスなのだ。うまくすると習慣になるかもしれない。

翌朝、ステップも軽く台所のシンクの前に立ってみると、
「負けた！」

悔しいけど夫がやる家事仕事は四十年以上主婦をやっている珠絵より確かに清潔で徹底している。シンクに一点の汚れのあとも見あたらなかった。

雅之は「濡れ落ち葉」どころか、落ち葉に羽根が生えて自在に飛んでいる。



河島敬子（かわしま けいこ）

一九四四年東京生まれ。聖心女子大学卒業後英国大使館勤務を経て結婚後三人の息子は独立し現在は家庭裁判所の調停委員。夫と二人暮らし。文章を書くことには興味があり身近な事柄を題材にしたエッセイを書く。題名「セレンディピテイ」（幸福を発見する能力）は人間、どんな環境に遭遇しても上手く人生を楽しんでプラスに転化させることができるはず、との期待を込めて創作しました。